

伝統的ロシア建築と コンスタンティン・トーンの「ビザンツ様式」

池本今日子 (大東文化大学文学部)

Traditional Russian Architecture and Konstantin Thon's "Byzantine Style"

Kyoko IKEMOTO

建築は時代の精神を体現し、あるいは、国家や王侯の権力や権威の大きさを表現する。為政者による統治精神についての視覚的な宣言ともなりうる。ピョートル大帝がネヴァの河口に出現させたバロック様式の都市が、彼のヨーロッパ化改革のシンボルとなったことを想起するだけで十分であろう。本稿は、コンスタンティン・トーン（1794-1881年）が牽引したロシア＝ビザンツ様式の聖堂をとりあげる。それは19世紀半ばの代表的な建築様式であり、ネオ＝ロシア様式の初期のものである。彼の建築は当時「ビザンツ様式」Византийский стильと呼ばれた。モスクワの救世主ハリストス大聖堂¹が代表作である。この様式での彼の最初の設計は、ペテルブルクのカリンキン橋のエカテリーナ聖堂であった。その設計図（1830年）は、「ロシアにおける独自の教会建築の復活の起源であり出発点」とも後に評されることになる²。ただ、彼の建築は、救世主ハリストス大聖堂やエカテリーナ聖堂のような、丸屋根を5個持つタイプだけではない。本稿はこの「ビザンツ様式」の特徴を考察する。この作業は、ロシアの建築様式と政治の関わりについての今後の検討に資するためでもある。

トーンの様式について、他の時代のロシアの建築様式との関係で議論がある。次の2点にまとめられる。

第1に、彼の建築の17世紀までのモデルについて、様々な見解が存在した。「ビザンツ様式」のモデルは文字通りビザンツ帝国の建築様式であるという印象を与える一方、ピョートル大帝によるヨーロッパ改革前の建築様式、すなわち、いわゆる「伝統的」様式であると考えられている。後者にも様々あり、キエフ・ルーシからウラジーミル、15世紀のモスクワ、16世紀、17世紀のモスクワなど幅が広い。トーンの同時代には、建築家アンドレイ・ジュコフスキーが「ビザンツ様式」のモデルを、モスクワ・クレムリンのウスペンスキー大聖堂（15世紀）と見做した。救世主ハリスト

ス大聖堂建築委員会の上級建築家イヴァン・スヴィヤゼフは、トーンによるセミヨノフスキー連隊大聖堂の設計図の序文で、彼の様式全般は、ヨーロッパ化改革まで長く維持された、キエフ・ルーシの「我々の教会の古い最初の型」の復活である、と書いた。一方、1872年に建築家のレフ・ダリーは、「ビザンツ様式で建てられた我々の教会と本物のビザンツの聖堂との類似は、まさしく疑わしい」だけでなく、「ビザンツ様式」に「真のロシア様式との共通点は少ない」と論じた³。

20世紀第4四半世紀以降の建築史家の成果に目を転じる。ボリソヴァは、エカテリーナ聖堂について、「古いロシアの聖堂」を想起させると述べた。キリチェンコは、丸屋根を5個持つタイプのトーンの聖堂のモデルは、モスクワ・クレムリンのウスペンスキー大聖堂、アルハンゲリスキー大聖堂、ブラゴヴェシエンスキー大聖堂などにあると分析した。彼の40年代の別タイプの聖堂に関しては赤の広場の堀上のポクロフ大聖堂（通称ワシーリー大聖堂）などの影響を指摘している。ベルタシュは、イタリアの影響を受けたロシアの「15-16世紀の記念碑的建築」をモデルと見做した。スラヴィナは、彼は「伝統的」特徴や様式を自由に取り合わせた、と考察した。文化史のウォートマンは、救世主ハリストス大聖堂について、モスクワだけでなく、ウラジーミルのウスペンスキー大聖堂をも想起させると述べ、それらをビザンツ様式の系譜と位置づけた⁴。

第2に、トーンの様式、とりわけ救世主ハリストス大聖堂に代表される、丸屋根を5個持つ聖堂に新古典主義ないし古典主義の影響が指摘されることが多いが、その影響の質や量についての捉え方は様々である。ベルタシュは彼の様式を15-16世紀の建築と古典主義の融合と考え、彼がイタリア・ルネサンス建築の影響を受けた聖堂をモデルとしたのは偶然ではない、と述べた。ボリソヴァは、合理主義的幾何学的で明確な処理ゆえに、彼の設計には民族的というよりも、ヨーロッパの様式の影響が濃いと指摘した。シヴィトコフスキーは、彼の建築は基本的に新古典主義様式の特徴を備えるとは見做す。スラヴィナは、古いロシアの様式の模倣において彼は新古典主義の影響から免れなかったとしばしば語られるが、ヨーロッパ化改革前のロシアの教会建築においても、17世紀を除いて、規律への志向があった、と論じた。キリチェンコは、救世主ハリストス大聖堂の特徴であるギリシャ十字形の聖堂はロシアにすでに存在していたものであり、また、ヨーロッパ化改革後の18世紀においてもエリザヴェータ帝の時代にロシア的要素が建築で考慮されたと述べ、トーンはあくまでロシア建築の伝統に従ったにすぎないと論じた。その一方、丸屋根を5個持つ聖堂に新古典主義とのつながりを指摘する。ブラムフィールドは、逆に、彼がヨーロッパ化改革前の建築を真剣に研究したこと、彼の建築がロシア固有の建築の復活と当時見做されたことと、聖堂の構造とを根拠として、救世主ハリストス大聖堂はロシア「中世」の構造を持っており、その一方、「中世」や新古典主義のデザインの模倣は表面的なものであると分析した⁵。

このように、トーンの教会建築のモデルがロシアのいつの時代なのかという点、ヨーロッパの建築や、その様式による建築の影響が本質的なものかという点、また、その影響の深さについて一定の理解はない。救世主ハリストス大聖堂などを彼が設計した30年代を第1期、40年代を第2期とすると、第2期は第1期よりも注目度が低い、それぞれの時期毎にモデルを考察する必要がある。さらに、彼の様式がどの時代をモデルとしたかを検討するためには、様々な時代のロシアの教会建

築の特徴について考察する必要がある。

以上の点を鑑み、まず、ピョートルによるヨーロッパ化改革前のロシア教会建築の時代による変化を整理する。次に、トーンの様式を分析し、そのモデルが何かを検討する。それにより、「ビザンツ様式」とは何かを考察する。

1 ロシアの教会建築

1-1 ビザンツの様式のロシア化

ウラジーミル1世（キエフ大公 在位 978-1015年）は、ビザンツからキリスト教信仰と建築様式を受容した。初の石造聖堂となった什一聖堂 Десятинная церковь（989-996年。1240年破壊）は、ギリシャの石工により、ビザンツの建築様式を基本として建てられた⁶。丸屋根を戴く内接十字型聖堂である。ビザンツ中期に、古代ローマ建築と一線を画する独自の建築様式が発展した。内接十字型は8世紀に出現し、中期ビザンツで最も普及した型である。集中堂式の一種であり、最も単純な形では、ほぼ正方形の身廊部、1個の丸屋根、4本の中柱、東に1個の後陣（アプス）から成る。丸屋根を支える4本の中柱により、身廊部が9分割され、丸屋根の下の正方形の中央ベイ（柱間）が要となって、東西南北のベイによりギリシャ十字を形成する。中央ベイの縦横の幅が、他のベイよりも広い。ロシアでは、矩形の身廊部、鼓胴部が支える1（乃至複数）個の丸屋根、4（乃至6）本の中柱、東に3（乃至1）個の後陣、東西に延びる3廊（乃至5廊）からなる。西側に拝廊を、さらに周囲に歩廊を付属する場合がある⁷。内接十字型はロシアで様々に変化し、長い間、その聖堂の基本となった。

ヤロスラフ（キエフ大公在位 1016-54年）が建てたキエフのソフィア大聖堂 Софийский собор（1011-37年）も基本的に同型である。ただし、ソフィア大聖堂は複雑で、規模も大きかった。中央ベイの縦横の幅が他の2倍あり、その要の上の背の高い鼓胴部に中央の丸屋根が載り、まわりに12の丸屋根をピラミッド状に従えた。内部は装飾的だが、ファサードは簡素であった。この内と外の対照が、長い間ロシアの教会建築の特徴となる⁸。11世紀のチェルニゴフの救世主大聖堂、ノヴゴロドのソフィア大聖堂（図1）なども基本的



図1 ソフィア大聖堂（ノヴゴロド）2019年夏筆者撮影



図2：ポクロフ聖堂（ネルリ） И. Толстой, Н. Кондаков. Русские древности в памятниках искусства: памятники Владимира, Новгорода и Пскова. вып. 6. СПб, 1899. с. 15.

に同型である。

キエフ・ルーシの聖堂建築は、12世紀に入り独自性を深め始めた。ファサードを分割するアーチが全て同じ高さとなり、これはその後の特徴となる。この12世紀にはモンゴルが侵攻し、ルーシの中心が北東へ移動した。ウラジーミル＝スズダリ

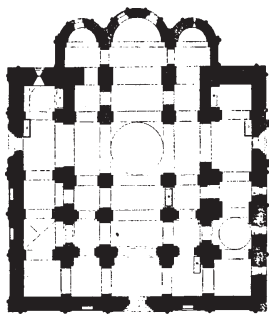


図3：ウスベンスキー大聖堂（ウラジーミル）

И. Толстой, Н. Кондаков. Указ соч. с. 13-14.

様式はキエフの伝統を受け継ぐが、拝廊は省かれ、主要部分が立方体に近づいた。窓が少なく狭くなった。外壁の浮彫装飾を特徴とする。アンドレイ・ボゴリユブスキー公（ウラジーミル大公 在位1157-74年）が建設した、ボゴリユボヴォのネルリ河畔のポクロフ聖堂 Церковь Покрова на Нерли（1165年）（図2）は、白い小型の典雅な聖堂である。背の高い立方体と4本の中柱、3分割されたファサードを持ち、1個の丸屋根を戴く内接十字型であり、元々は、1個の丸屋根を持つ立方体を低い回廊が三方から囲んでいた。以後ロシアでよく用いられる深い段状のロマネスク式ポータル（ポータル）が採用され、また、装飾柱に支えられたアーチ飾りの帯がファサードの上下を分け、上部には浮彫が施された。ドイツを含む他の土地の職人が招かれて建設に参加しており、ロマネスク的意匠はその影響と考えられる⁹。

クリヤジマ川の高い河畔に建つウラジーミルのウスベンスキー大聖堂 Успенский собор（1158-60年）（図3）は、元々6柱の聖堂だったが、フセヴォロド3世（ウラジーミル大公 在位1176-1212年）の時代に拡張され（1185-89年）、回廊を増設して、丸屋根を5個持ち、5廊からなる聖堂となった。ファサードの中頃には付柱に支えられた飾りアーチの帯が施された。突出したコンソールに、ボゴリユブスキー公の時代のロマネスクの職人の影響が認められる。フセヴォロド3世はまた同地に、ドミトリー大聖堂 Дмитриевский собор を建てた（1194-97年）。より壮大だが、構造はネルリと同様であり、带状装飾よ



図4：セルギイ大修道院三位一体大聖堂。2019年夏筆者撮影



図5：アンドロニコフ修道院スバスキー大聖堂（モスクワ）。2019年春筆者撮影

り上の部分が浮彫で覆い尽くされた。浮彫のモチーフはロマネスク様式と同様、様々なところからとられた可能性が指摘される¹⁰。

12世紀末から13世紀初頭には、土台を高くした丸屋根を1個持つ、垂直性が際立つ聖堂が登場した。チェルニゴフのパラスケーヴァ聖堂 Храм святой Параскевы Пятницы (1200年頃)は伝統的な4柱の平面図だが、立方体上の半円のヴォールトに二重のアーチが重なり、丸屋根の鼓胴部が持ち上がった。14世紀初頭に建てられたモスクワの最初のウスペンスキー大聖堂もこのタイプに近い¹¹。

15世紀に入り、モスクワの様式が誕生する。セルギイ大修道院の三位一体大聖堂 Троицкий собор Троице-Сергиевой лавры (1422-23年、1925-26年修復) (図4)や、モスクワの東、ヤウザ川左岸に位置するアンドロニコフ修道院のスパスキー大聖堂 Спаский собор Спасо-Андроникова монастыря (1425-27年、1959-60年再建) (図5)などが代表的である。ほぼ正方形の平面図と3個の後陣、4本の中柱、1個の丸屋根、さらに、尖ったアーチを戴く段状のロマネスク式ポルタルを3面に持つ。尖ったザコマーラ (内側の丸天井と連携する、外壁上端の半円形ないし尖った半円形部分) に、ココシニク (偽のザコマーラ、半円形ないし尖ったアーチ) が重なる。聖堂は土台の上に据えられ、ポルタルには階段でアクセスする。ファサードの上下を分けるのはアーチの帯ではなく、平面的彫刻である。アンドロニコフの聖堂は、立方体と鼓胴部をココシニクがつなげる。従来よりも複雑な形状である。13世紀初頭の聖堂と似ているが、垂直性はさほど強調されない¹²。

こうしてキエフ・ルーシでビザンツから導入された内接十字型聖堂は、装飾においてロマネスク様式の影響を受けながら、独自に発展した。

1-2 モスクワ・ルネサンス

15世紀後半、モスクワ大公国は北東ルーシの統一を行う一方、独自の府主教の任命 (1448年)、ビザンツ帝国の滅亡 (1453年)、ウグラ河畔の対峙 (1480年) という一連の出来事により、ビザンツ帝国とコンスタンティノープルの総主教座、及びタタールからの独立を進めた。70年代には、ハンザ同盟の一員で、リトアニアと政治的につながるノヴゴロドに侵攻して併合した。80年代に入ると、ポーランドと同君連合を形成するそのリトアニア大公国自体へ進出を始める。ヨーロッパへの関心が強まり始めた時代である。

1472年11月にイヴァン3世 (モスクワ大公在位 1462-1505年) は、最後のビザンツ皇帝の姪で、ローマ教皇のもとに庇護されていたソフィア・パレオロギナ (1449-1503年) を妃に迎えた。それに先だち、同年4月30日



図6：ウスペンスキー大聖堂 (モスクワ)
Найденов Н. А. Москва. Соборы, монастыри и церкви. ч. I: Кремль и Китай-город. М., 1883.

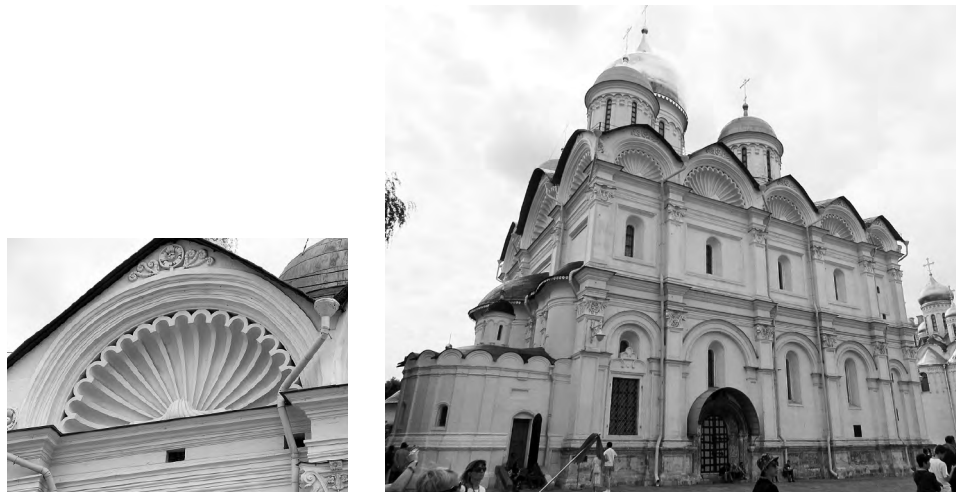


図7：アルハンゲリスキー大聖堂。2019年夏筆者撮影

に、老朽化したモスクワ・クレムリンのウスペンスキー大聖堂をウラジーミルのそれを大型化する形で建て替えるため、起工式が行われた。しかし、これは1474年に倒壊し、イヴァン3世は、ポローニヤの建築家アリストーテレ・フィオラヴァンティに建設を依頼した（1475-79年建設）（図6）。彼はウラジーミルの大聖堂から、5個の丸屋根、6本の中柱、ポルタルのアーチ、付柱の上の飾りアーチの帯などを取り入れたものの、それらを、明晰さや幾何学的規則性、均整、対称性を特徴とするルネサンス建築の原則のもとに整えた。規則性や均整が原則となり、ベイは中央を特別に広げることなく均等化された。ファサードの3分割では、中央が強調されず、幅と高さにおいて等分に分割された。後陣の張り出しは小さく、低くなり、ウラジーミルでは別々に配置されていた飾りアーチの帯と下段の窓が一体化した¹³。その規模と、ルネサンス由来の明晰な線は、大公権力の大きさと堅牢さ、ヨーロッパとの関わりを表現する。

イヴァン3世の晩年には、同じくクレムリンのアルハンゲリスキー大聖堂 Архангельский собор, Собор святого Архистратига Михаила в Кремле（図7）の建設がアロイジオ（アレヴィス・ノーヴィ）により始まった（1505-08年）（図7）。丸屋根を5個持つ内接十字型である。ノーヴィは伝統的要素として、フィオラヴァンティと異なり、中央のベイを他よりも広くした。その一方、フィオラヴァンティの大聖堂の要素を一部採用した。大きな貝の模様を施したザコマーラなどイタリアの影響が目立つ。同時期に、クレムリンのこの広場では、グラノヴィータヤ



図8：主の昇天聖堂（コロメンスコエ）。2019年春筆者撮影

宮殿 Грановитая палата がピエトロ・アントニオ・ソラリオにより建設された (1487-91 年)。ブラゴヴェシエンスキー大聖堂 Благовещенский собор も同時期である (1484-89 年)。アルハンゲリスキー大聖堂は、この時期のクレムリンの建物の中で最もイタリア的であった¹⁴。

15 世紀にはイタリア・ルネサンスの明確な構造の影響を強く受けながら、丸屋根を 5 個持つ内接十字型聖堂が発展した。クレムリンの聖堂群は、ヨーロッパを含めた内外に統一と独立を示すのにふさわしいものであった。

1-3 天幕型尖塔及び多宝座聖堂

16 世紀、ヴァシーリー 3 世 (在位 1505-33 年) とイヴァン 4 世 (在位 1533-84 年) の時代に、丸屋根を戴く従来の内接十字型聖堂とは大きく異なる、印象的な新しいタイプが出現した。後陣のない集中堂式であり、重要なモチーフは八角錐の天幕型屋根 (シャチョール) の尖塔である¹⁵。

石造の天幕型尖塔は、多くの場合、ヴァシーリー 3 世がのちのイヴァン 4 世の誕生の記念にコロメンスコエ離宮の村に建てた主の昇天聖堂 Церковь Вознесения Господня в Коломенском (1529-32 年) (図 8) が最初のもと考えられている。これはモスクワ川河畔の高台に建つ単塔の教会であり、イタリア人建築家ペトロク・マルイによる可能性が高い¹⁶。尖ったココシニクやシリンカ (四角い装飾) など 15 世紀までのモスクワの装飾と、ゴシック様式の天蓋装飾、古典主義的オーダーやペディメントなどが用いられた。塔部分は、立方体の上に八角体、天幕型尖塔と重なるのだが、立方体から八角体への移行が、ココシニクの層により、なめらかに処理された。15 世紀のアンドロニコフの聖堂に見るように、立方体から鼓胴部への移行としてココシニクを使用する例はすでにあったものの、主の昇天聖堂におけるココシニクの層による美しい移行はルネサンスの息吹を感じさせる。水平に広がるギリシャ十字形の開廊部分により、教会の上昇性が強調された。大規模な垂直性の強調はロシアで初めてである。幾何学的構造にイタリア・ルネサンスの影響を見ることが出来る。ギリシャ十字形もイタリア・ルネサンスでよく用いられた。しかし、ルネサンスではドームが載ると異なり、コロメンスコエでは尖塔が載る¹⁷。

イヴァン 4 世は、主の昇天聖堂と谷を挟んだディヤコフ村のモスクワ川を臨む高台に、1547 年から 55 年の間にヨハネ斬首聖堂 Церковь Усекновения Главы Иоанна Предтечи в Дьякове (図 9) を建てた。建築の承認は 1529 年であり、ヴァシーリー 3 世による。承認時におけるイタリア人建築家の設計への参加が推測される。一方、建築時に彼らの姿はなかった。新しいタイプの独特な聖堂である。丸屋根を支える太い八角体の塔の周囲を、同じ形の 4 本の小型の塔が対照的に取り囲む。多宝座の集中堂式聖堂であり、それぞれの塔の内



図 9: ヨハネ斬首聖堂 (ディヤコフ村)。2019 年春筆者撮影



図10：堀上のポクロフ大聖堂。2019年春、夏、筆者撮影

部に宝座がある。天幕型尖塔は外にはなく、丸屋根の内側に組み入れられた。様々な意匠が壁面を覆う。幾何学的規則性や集中堂式聖堂のコンセプトに、ルネサンスの影響を見ることが出来る。特にフィラレーテ（アントニオ・ディ・ピエトロ・アヴェルリーノ）の影響が考えられる¹⁸。

このディヤコフ村の聖堂は、複雑な内部構造を持つ多宝座聖堂として、また、装飾的な聖堂として、赤の広場の堀上のポクロフ大聖堂の先駆者と見做されている¹⁹。多宝座の聖堂は、ほかに、同じくイヴァン4世期の1550年代にヴォルガ上流の河畔に建てられたスタリツァ（トヴェリ州）の旧ボリス＝グレープ大聖堂 Старый Борисоглебский собор в Старице（1558-61年、19世紀初頭建て替え）を数えるにすぎない。この聖堂は円筒風の本体の上に、中央の大きな塔とそれを囲む4個の尖塔を載せていた²⁰。

こうして16世紀に、ルネサンスの影響を受けながらも、5個の丸屋根の聖堂とは異なる、独特なギリシャ十字形ないし多宝座の集中堂式聖堂が成立した。

1-4 装飾と複雑性の17世紀

堀上のポクロフ大聖堂（図10）Собор Покрова, что на Рву（1555-1561年）は、天幕型尖塔を用いたロシアの聖堂として、最も有名なものであろう。

この聖堂は、イヴァン4世が1552年のカザン占領を記念して創建したものである。モスクワ川河畔の高台、赤の広場に位置する。プスコフのポストニク・ヤコヴレフが建設した。創建当時は中央の主聖堂の尖塔を8個の丸屋根の聖堂が囲む八角体を基礎とし、かなり明確で規則的な設計図が書かれた（図11）。主聖堂と、周囲の4聖堂も八角体である。ここでは、ディヤコフ村の聖堂同様に、尖塔が内部に組み込まれている。コロメンスコエやディヤコフ村の

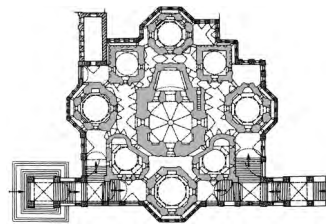


図11 堀上のポクロフ大聖堂創建当時の平面図。作者不明

聖堂などロシアの石造聖堂や木造聖堂のデザインの影響のほか、レオナルド・ダ・ヴィンチの集中堂式教会堂案、サン＝ピエトロ大聖堂のブラマンテの集中堂式の図面案、フィラレーテのいくつかの案やスケッチと類似する。イタリアの要塞の塔との類似性も指摘される。クレムリンの主門であったフロロ＝ラフル（現スパスキー）塔に面する西側から見る姿は、尖塔を軸とする左右対称である²¹。

とはいえ、赤の広場やモスクワ川から見る姿は、左右対称ではなく、尖塔を戴く中央の主聖堂の後陣の分だけ、その尖塔が中央よりも西側にずれる。そのうえ、16世紀後半には通称の由来となる丸屋根のワシーリー聖堂が増築され、さらに、17世紀後半には丸屋根を伴わない聖堂と尖塔屋根の鐘楼が添えられた。構造は規則性を残しながらも、非規則性が際立つものとなった。一方、16世紀末ないし17世紀に丸屋根の形状が玉葱型に変わったと考えられている。また、17世紀に外壁の色鮮やかな装飾の多くが加えられた。大聖堂の外壁は、ルネサンスやゴシック、とりわけロシアの旧来の装飾が覆う²²。

八角体と玉葱頭、ココシニクが多用され、同じモチーフの大小の繰り返し絶妙なバランスと調和を生み出す。見る場所により変わる趣を特徴とする。堀上のポクロフ大聖堂は静的な左右対称ではなく、動的な均衡とシルエットのリズム感に美しさがある。非対称的な建築はイギリス中世の住宅などにおいても特徴的であった。ロシアでは17世紀半ばのアレクセイ帝のコロメンスコエの離宮（木造）や民衆の家屋がその例である²³。この聖堂は前述のようにイタリア・ルネサンスや、ロシアの過去の聖堂の影響を受けたと考えられるが、その最終的な姿はきわめて独特なものである。天幕型尖塔はこの聖堂以来、ロシアの典型的なモチーフとなった²⁴。17世紀のロシアの聖堂はヨーロッパの影響を再び受けるまで、非対称性を特徴とすることになる。

16世紀末に出現したゴドゥノフ様式は、玉葱型の丸屋根を1個持ち、中柱を持たない小型の立方体と、コーニス上のピラミッド状のココシニクの層、装飾性を特徴とした。モスクワ南部のドンスコイ修道院の小大聖堂 Малый собор Донской иконы Божией Матери (1593年)が例である。この様式は17世紀の聖堂に影響を与えた。17世紀初頭にミハイル・ロマノフ（在位1613-45）がモスクワ北東のルプツォヴォ離宮の村に建てたポクロフ聖堂 Храм Покрова Пресвятой



図12：ポクロフ聖堂（奥）と門、囲い（ルプツォヴォ）Найденев Н. А. Указ соч. ч. IV: Местность за Земляным городом. М., 1883.



図13：ポクロフ聖堂（メドヴェトコフ）Путеводитель по Москве, изданный Московским архитектурным обществом для членов V Съезда зодчих в Москве / Под ред. И. П. Машкова. М., 1913

Богородицы в Рубцове (1619-27年) (図12)は、ドンスコイ型聖堂に開廊と、後陣の脇の2礼拝堂が付属する。ミハイル・ポジャルスキーが建てた赤の広場のカザン大聖堂 Собор Казанской иконы Божией Матери (1625年。1936年破壊、1990-93年再建)もまた、ココシニクの層に支えられた1個の丸屋根を戴く無柱の小型立方体を持つ²⁵。一方、1620年代に彼がモスクワ北部の自領に建てたメドヴェトコフのポクロフ聖堂 Храм Покрова Пресвятой Богородицы в Медведкове (1623-24年) (図13)は、八角体を土台とする天幕型尖塔と、それを囲む4個の玉葱頭を持つ立方体の聖堂に、鐘楼が付随した。ウグルチのアレクシイ修道院 Алексеевский монастырьのウスペニエ聖堂 Церковь Успения Пресвятой Богородицы (1628年)は、天幕型尖塔を戴く聖堂に、尖塔型の2鐘楼と、西側に大きな食堂が付属した。聖堂、食堂、鐘楼の三部構成である²⁶。立方体の上に八角柱が載り、そこから尖塔が立ち上がる型は、「立方体上八角体」Восьмерик на четверике と呼ばれる。

17世紀半ばに、尖塔は、中心の聖堂ではなく鐘楼に据えられることが多くなった。商人がキタイ＝ゴロドに建てた三位一体聖堂 Церковь Троицы в Никитниках (1655年) (図14)は、玉葱頭を5個持つ無柱の聖堂に、北東と南東に2礼拝堂と、西と南に歩廊、北西に天幕型尖塔の鐘楼が付随する。ココシニクが多用され、赤と緑と白の配色が印象的である。モスクワ装飾様式の代表的な教会である。モスクワ

装飾様式は、玉葱型丸屋根をもつ小さい聖堂、低い拝廊、天幕型尖塔の三部構成の教会で発展した。三部構成には非対称性が際立つ様々な形があったが、17世紀末に向けて、聖堂と低い拝廊、尖塔が東西の軸線にそって一直線ないしそれに近い形で並ぶ、構造的に安定した「艦船型」に収斂した²⁷。

17世紀末には、ヨーロッパの影響のもとにモスクワ・バロック(ナルイシュキン・バロック)が登場した。対称性と均衡、装飾柱、古典的オーダーなどを特徴とする。モスクワ川右岸のヤキマンカのイオアン聖堂 Храм Святого Иоанна Воина на Якиманке (1704-13年) (図15)は艦船型のその一例である²⁸。

17世紀の聖堂は、ヨーロッパの影響が再び強まるまで、ココシニクや天幕型尖塔などのモチーフを多用し、また、非対称性と装飾性を特徴とした。



図14：三位一体聖堂(現ニキトニコフ通り) Найденов Н. А. Указ соч. ч. 1: Кремль и Китай-город. М., 1883.



図15：イオアン聖堂(ヤキマンカ) Найдено. Указ соч. ч. 3: Земляной город. отд-ние 2. М., 1883.

2 トーンのネオ=ロシア様式

2-1 トーンの第1期ネオ=ロシア様式

1838年にトーンは聖堂の図面集を出版した²⁹。この図面集に収められた図面を第1期のものとする。

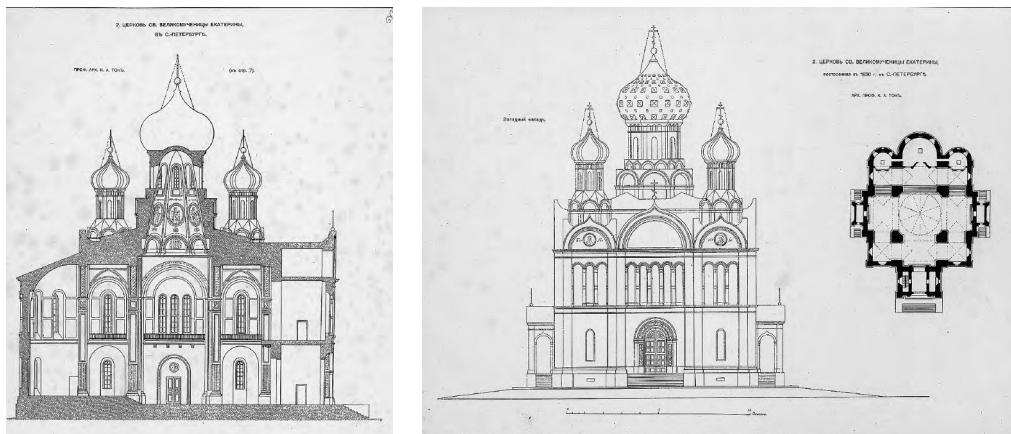


図16：トーン、エカテリーナ聖堂（1838年図面集）Барановский Г. В. *Архитектурная энциклопедия второй половины XIX века* т. 1. СПб., 1902.

ペテルブルクのカリンキン橋のエカテリーナ聖堂 Церковь во имя святой великомученицы Екатерины（1831-37年。1929破壊）（図16）が、彼の最初の「ビザンツ様式」の聖堂である。玉葱型の丸屋根を5個持つ小さい聖堂で、主要な玉葱型丸屋根を囲んで四隅に均等に小さい玉葱頭が4個並ぶ。

玉葱頭や、階段状の基礎を持つその鼓胴部、ココシニク、ファサードの3分割、突起のあるザコマラ、アーチの帯、背の高い半円筒状の後陣、ポルタルなどが17世紀までのロシアの様式に類似する³⁰。ウスペンスキー大聖堂などロシアの内接十字型に特徴的なものだけでなく、ココシニクや玉葱頭など、17世紀の装飾に特徴的なものも目立つ。16世紀の手法も用いられた。中央のドームの円筒の鼓胴部に内側から、ディヤコフ村の聖堂および堀上のポクロフ大聖堂と同様に、尖塔がはめ込まれた³¹。

後陣の中央と、3分割されたファサードの中央部分とポルタルが突出し、ギリシャ十字形を少し思わせるものの、5個の丸屋根、4柱の内接十字型といえるであろう。ロシアで丸屋根を5個持つ内接十字型の代表作はウラジーミルとモスクワのウスペンスキー大聖堂、アルハンゲリスキー大聖堂である。すっきりとした外観を持つモスクワのウスペンスキー大聖堂が、トーンの構造のモデルといえる。その一方、エカテリーナ聖堂は、正面ファサードが対称であるだけでなく、後陣とファサード中央の突出形状により崩れるとはいえ、横断面もまた対称

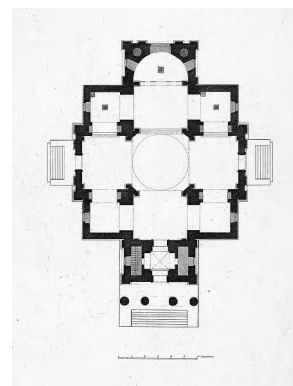


図17：1824年の図面集 No.30（注32参照）

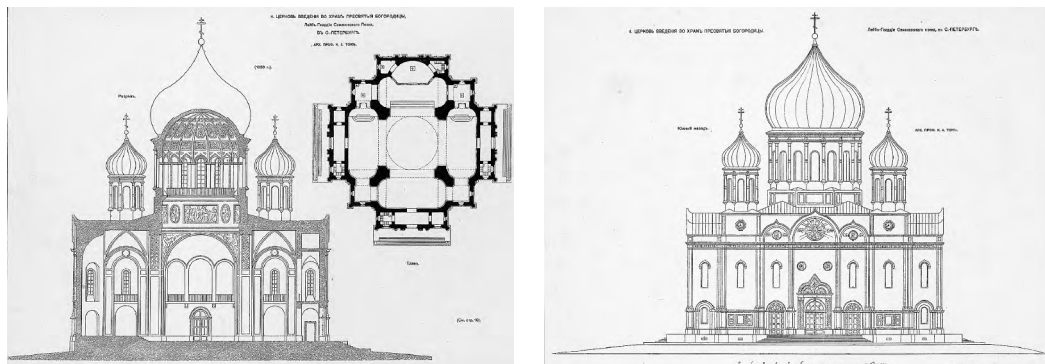


図18：トーン、セミヨノフスキー連隊大聖堂（1838年図面集）Барановский Г. В. Указ. соч.

に近い。さらに、水平線と垂直線が均衡をとる。これらは、ウスペンスキーやアルハンゲリスキー大聖堂にない特徴である。

ブラムフィールドがスラヴィナの著作に基づいて指摘したように、たしかに、彼は過去の建築を調査した上で設計した。モスクワのウスペンスキー大聖堂自体がルネサンスの影響を受けてもいる。また、スラヴィナが指摘したように、そもそも内接十字型の聖堂は一定の対称性を持ち、対称性もまたロシアの伝統であったといえよう。しかしながら、トーン的设计は、ウスペンスキー大聖堂より圧倒的に規則的、合理的である。モスクワ・ルネサンスではなく、ヨーロッパ建築の影響を受けていると考えるのが自然であろう。

彼は、ロシアで新古典主義が全盛期であったアレクサンドル1世治世の1804年から1818年まで帝室美術アカデミーで勉強をしており、新古典主義が教育の土台にあった。それだけでなく、アレクサンドル1世の下で1824年に、アンドレイ・ミハイロフなどの監修で刊行された、新古典主義に則った教会建築の模範図案集に、エカテリーナ聖堂と類似する図面がある（図17）³²。この聖堂の基本的な設計の土台に、合理性と厳格な対称性などを特徴とする新古典主義を認めうる。

トーンは、このエカテリーナ聖堂のあと、1830年から34年にかけて、立て続けにいくつかの聖堂を設計した。ツァールスコエ・セローのエカテリーナ大聖堂 Собор святой великомученицы Екатерины（1831年設計、1939年破壊、2010年再建）、モスクワの救世主ハリストス大聖堂 Храм Христа Спасителя（1831年設計、1931年破壊、2000年再建）、ペテルゴフのペトロ＝パヴロ大聖堂 Собор Святых Петра и Павла（1833設計、1930年破壊）、ペテルブルクのセミヨノフスキー連隊のヴヴェジェンスキー大聖堂 Введенский собор лейб-гвардии Семёновского полка（1834設計、1933年破壊）である。

いずれも大きな特徴は似ているが、この時期の一連の聖堂の中で、セミヨノフスキー連隊大聖堂（図18）と救世主ハリストス大聖堂（図19）とでは後陣が張り出さず、極端な玉葱頭やココシニクは

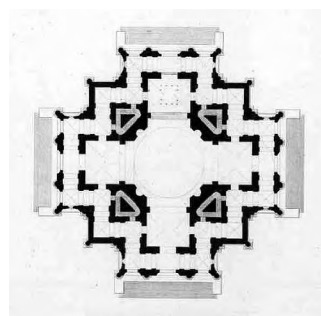


図19：トーン、救世主ハリストス大聖堂（1838年図面集）（注29参照）

後退している。内部にはめ込まれた尖塔もない。ファサードの3分割された部分の突出により、ギリシャ十字形を形成する。4本の中柱は外側に向けて延びる形をしている。これは周囲の4個の丸屋根が中央の丸屋根から離れていることに対応している。救世主ハリストス大聖堂は巨大であり、中柱や壁も大幅に変化した。

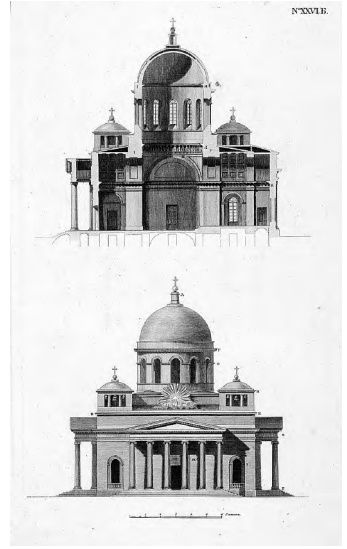
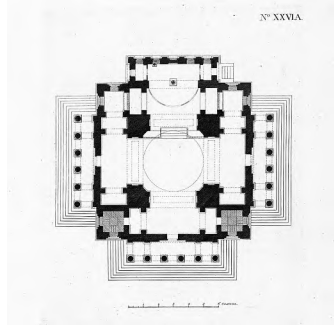


図 20 : 1824 年の図面集、No. 26。

このタイプはとりわけ、丸屋根を5個持つ15世紀のモスクワの聖堂と同時に、ヨーロッパの

様式とのつながりを示す。ギリシャ十字形の平面図はビザンツでも用いられたが、西欧でもビザンツの影響を受けてよく用いられた。聖堂の本体は四方に同じファサードを持ち、丸屋根と鼓胴部の高さ、本体部分の高さが同じであり、合理性、対称性、均衡性が際立つ。この厳格な均整が新古典主義を基礎としていることを示す。実際、前述の1824年のアルバムにもギリシャ十字形は多く、セミョノフスキー連隊大聖堂と同じような図面を複数見ることができる(図20)³³。このタイプはとりわけ、新古典主義建築の土台の上に、ロシアの伝統的な意匠が施されたと考えうる。救世主ハリストス大聖堂では、さらに、正教会を称える彫刻が外壁に施された³⁴。

以上の5個の丸屋根を持つ二つのタイプ、エカテリーナ聖堂型とセミョノフスキー連隊大聖堂型が30年代のトーンの典型的な聖堂であり、19世紀半ばと後半のロシア帝国を席卷することになる³⁵。

モスクワのシーモノフ修道院 Симонов Успенский монастырь の鐘楼(図21)も設計された(1835年建築(以下同))。ヨシフ=ヴォロツキー修道院 Иосифо-Волоцкий монастырь (1490年)、ニーコンの新エルサレム大聖堂 Новоерусалимский монастырь (17世紀半ば)、ノヴォデヴィッチ修道院(17世紀末)の鐘楼や、イヴァン雷帝の鐘楼(16世紀初頭)をモデルとする。玉葱型の丸屋根を持つ多層の柱状の背の高い鐘楼である。このモデルの鐘楼はその後100年にわたり、もっともよく採用され、町や村、修道院の典型的風景となった³⁶。

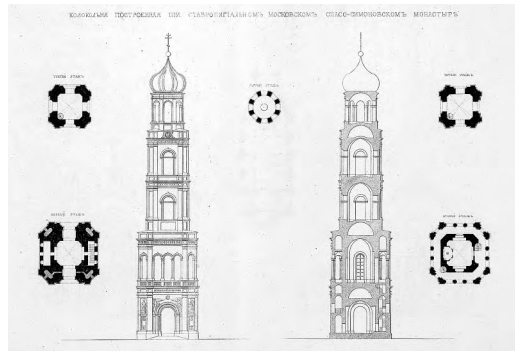


図 21 : トーン、シーモノフ修道院鐘楼(1838年図面集)

1838年に出版されたトーンの図面集には、1個の丸屋根の無柱聖堂と尖塔型鐘楼、拝廊からなる

三部構成の教会も収められた³⁷。

2-2 トーンの第2期ネオ=ロシア様式

1840年代に入ると、トーンが設計する聖堂が変化した。1844年に彼は先のアルバムを増補図面集を出版した³⁹。天幕型尖塔の聖堂や、玉葱頭ではなく天幕型尖塔を持つ聖堂と拝廊、鐘楼からなる三部構成が出現した。この尖塔が立ち上がる部分は立方体上八角体でもある。第1期の様式がモスクワのウスペンスキー大聖堂を範としたのに対して、この時期のモデルは、より遅い時代にあった⁴⁰。

ベテルブルクの近衛騎兵連隊のブラゴヴェシエンスキー聖堂 Церковь во имя Благовещения Пресвятой Богородицы Конногвардейского полка (1844-49年。1929年破壊) (図22)は、4柱の立方体の上に5個の尖塔をもつ。主な尖塔と、四隅に4個のより小さい尖塔が規則正しく配置される。内接十字型、ないし、ギリシャ十字形である。先のとがったココシニクが用いられた一方、17世紀までのものと異なり、周囲の4個の尖塔の胴体部分や屋根の平面図は四角形に近く、さらに、単塔

ではなく、5尖塔の聖堂である。

キリチェンコは、これを、堀上のポクロフ大聖堂とスタリツァの旧大聖堂のタイプに分類した⁴¹。トーンの近衛騎兵連隊聖堂は尖塔を採用した点ではそれらに似ているといえよう。スタリツァの旧大聖堂はたしかに、当時珍しい5尖塔タイプでもある。とはいえ、16世紀の両聖堂は多宝座であり、スタリツァの聖堂は本体部分が円筒風であった。近衛騎兵連隊聖堂と堀上のポクロフ大聖堂やスタリツァの旧大聖堂との関連性は、救世主ハリストス大聖堂とモスクワのウスペンスキー大聖堂の関連性よりも低い。この聖堂の平面図は、トーンの第1期のカリンキン橋のエカテリーナ聖堂と類似している。したがって、非対称性や動的均衡を特徴とする堀上のポクロフ大聖堂よりもむしろ、モスクワのウスペンスキー大聖堂の方が近く、さらに、エカテリーナ聖堂と同様に、ヨーロッパの様式が土台にあるといえる。

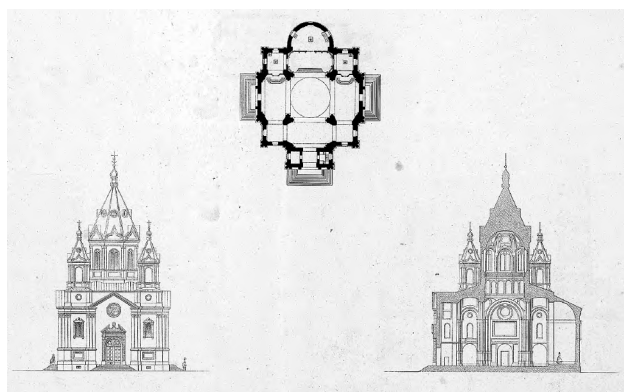


図22：トーン、近衛騎兵連隊ブラゴヴェシエンスキー大聖堂 (1844増補図面集) (注39参照)

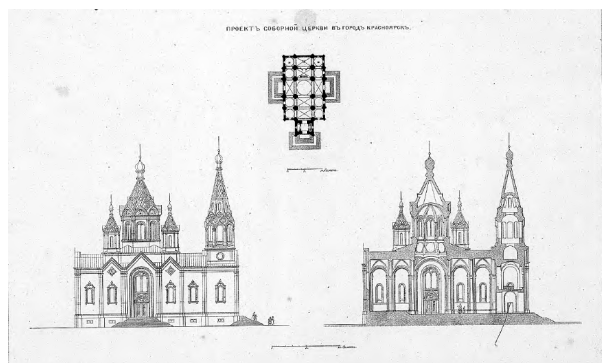


図23：トーン、クラスノヤルスクのロジェストヴェンスキー大聖堂 (1844増補図面集)

さて、三部構成はすでに第1期の図面集に登場していたが、この時期のトーンの教会では三部構成ないし三部構成風の聖堂が特徴的となる。

クラスノヤルスクの聖堂 Богородице-Рождественский собор (1845-61年。1921年破壊) (図23) は三部構成風だが、長方形の平面図を持つ5尖塔の聖堂と、尖塔型鐘楼から成る二部構成である。

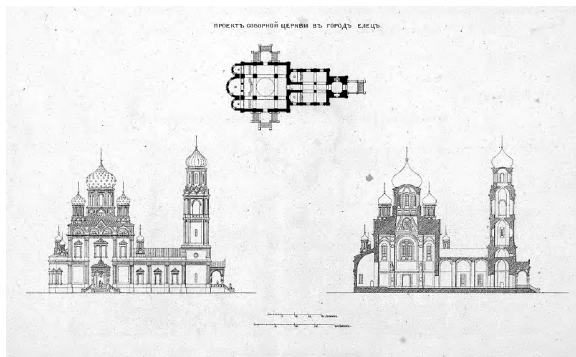


図24：トーン、ヴォズネセンスキー大聖堂（エレツ）
(1844年増補図面集)

ベテルブルクの近衛猟兵連隊のミロン聖

堂 Церковь во имя Святого великомученика Мирония (Мирона) лейб-гвардии Егерского полка (1849-55年。1934年破壊) は、5個の尖塔を戴く立方体（4柱）の聖堂と、この聖堂と一直線でつながる同じ幅の拝廊、より狭い幅の尖塔型鐘楼をもつ。5個の尖塔と三部構成に見える外観とを特徴とするが、聖堂と拝廊の内部は区切りがなく、1個の広間を形成する。

玉葱型丸屋根を5個持つ聖堂も設計された。アプテカルスキー島（ベテルブルク）のプレオブラジェニエ大聖堂 Храм Преображения Господня (1840-45年) は細長い長方形の平面を持つ。玉葱型丸屋根の下に柱はなく、また、周りの4個の丸屋根は中央に寄る⁴²。

アルバムに収められたエレツ（現リベツク州。ドン川の支流ソスナ川沿い）のヴォズネセンスキー大聖堂案 (1843年) Вознесенский собор (Елец) (図24) は、シーモノフ修道院タイプの鐘楼と拝廊、聖堂が、幅は異なるが一体として一列に並ぶ。艦船型の三部構成である。聖堂は、中央の背の高い玉葱型丸屋根を4個の丸屋根が取り囲む。6柱と後陣のある内接十字型であり、平面図はエカテリーナ聖堂に似る。なお、丸屋根が5個あるタイプでも、救世主ハリストス大聖堂のようなギリシャ十字形は増補図面集に用いられなかった⁴³。

三部構成タイプのモデルは、キリチェンコが述べるように、鐘楼、拝廊、教会からなる17世紀の艦船型の聖堂であろう⁴⁴。ただし、17世紀の整った艦船型の三部構成タイプでは、5個の玉葱型丸屋根をもつ聖堂と拝廊、尖塔の鐘楼という取り合わせが一般的であったが、トーンの場合は、全てが尖塔ないし丸屋根である。この統一性はヨーロッパ建築の合理性、規則性が設計の土台にあることを示す。また、三部構成の内部が17世紀同様に区切られているものもあるが、17世紀と異なり区切りがないものもある。

三部構成かどうかを問わず、17世紀のような装飾性はない。立方体上の角に対照的、規則的に尖塔あるいは丸屋根を置くという処理や、立方体と上部のバランスはヨーロッパ建築の影響を示す。三部構成ないし三部構成風は、単体の聖堂と比べて非対称性が増すとはいえ、合理的で規則的であり、対称性が優る。また、17世紀の聖堂が建て替えられた結果、三部構成をとる新古典主義様式の聖堂の例は存在していた。1824年の図面集には、鐘楼との二部構成だが、長方形の図面自体は複数含まれてもいた⁴⁵。

第1期に比べて、新古典主義の影響は低下している。とはいえ、第2期も基本的にヨーロッパの建築様式を土台としていた。この第2期の様々なモデルは、19世紀後半のロシアにおいて、第1期のものほどではないとしても、多くの正教会聖堂の範となった⁴⁶。

3. 「ビザンツ様式」

すでに述べたように、第1期の図面は、モスクワの救世主ハリストス大聖堂やセミョノフスキー連隊大聖堂、エカテリーナ聖堂など丸屋根を5個持つ聖堂が中心であった。第2期は、5尖塔の聖堂や、それを含む三部構成ないし三部構成風の聖堂を中心としていた。

トーンの様式とビザンツとの関わりは、主に第1期に採用された内接十字型が、ビザンツ帝国からキエフ・ルーシ時代に導入され、その後ロシアで独自の発展を遂げたものであるということ、また、アレクサンドル1世期の新古典主義の延長であったとしてもギリシャ十字形が採用されたこと、この二点に尽きる。第2期の図面集では内接十字型は少なくなり、ギリシャ十字形は採用されなかった。一方、トーンの様式は、すでに論じたように、ロシア中近世の様式をそのまま写したものでもない。根本的構造は、ヨーロッパの様式、とりわけ、第1期で顕著だが新古典主義の土台に立ったものである。そのうえで、伝統的建築の要素として、第1期には、丸屋根を5個持つ15世紀のモスクワ・クレムリンのウスペンスキー大聖堂をモデルとしたものが代表的であり、第2期には、17世紀に興隆した三部構成の使用が目立つ。尖塔をよく用いたが、従来珍しかった5尖塔を用い、三部構成においても丸屋根と尖塔の組み合わせに規則性、統一性をもたせた。17世紀と異なり、内部に区切りがないものもある。玉葱頭を用い、ココシニクの使用もあるが、第1期、第2期ともに、17世紀特有の装飾性や非対称性を模倣しようとはしていない。共通しているのは、装飾様式ほどの装飾や動的均衡への関心の低さである。

トーンはニコライ1世に捧げた前述の1838年のアルバム序文にこう記した。「古くから我々の国民性の要素とともに古い時代に生まれたこのビザンツ様式」は、「ロシアの心にとって貴重な」ものであり、その「現代における復活の経験」が皇帝の関心を得た、と。すなわち、トーンが復活に取り組んでいる「ビザンツ様式」とは、古い時代にロシアでその民族性とともに生まれたものであると考えられている。すなわち、ビザンツ帝国の建築様式ではない。トーンの図面集の表紙は、古いロシア文字で書かれていた。図面集が、古い文字が使われた時代の聖堂の「復活」と理解されることを求めていることを示す。

ニコライ1世は1841年3月25日に次の勅令を発した。「正教会の建設案の作成に際して、優先的にかつ可能な限り、古ビザンツ建築風が維持されるべきこと。注：このために、建築家コンスタンティン・トーン教授によって作成された正教会建築図面を最大限に考慮してよい」⁴⁷。したがって、最初の図面集に含まれる正教会聖堂の図面全てが「ビザンツ様式」であった。すなわち、エカテリーナ聖堂や救世主ハリストス大聖堂などの丸屋根を5個持つタイプだけではなく、丸屋根が1個のタイプや三部構成のものも含む。

さらに、トーンが1844年にやはりニコライ1世に捧げた増補図面集においても、表紙が古い文字で書かれていたことは言うまでもない。ここでは三部構成が多く取り上げられた。

したがって、これらの情報からは、「ビザンツ様式」は、最初の図面集に掲載された、丸屋根を5個持つ聖堂を指すとともに、トーンの両アルバムに掲載された三部構成など他の正教会聖堂の図面を全て含むと考えられる。それらは、ヨーロッパの建築様式、とりわけ、新古典主義を土台として、15世紀と、一部、17世紀のモスクワの様式、15-17世紀モスクワの様々なモチーフなどを取り入れて設計された。多様なデザインを用いるが、装飾性や動的均衡は取り入れなかった。「ビザンツ様式」とはこのトーンの建築をモデルとした建築を指す。

¹ この聖堂については、拙稿「救世主ハリストス大聖堂と二人の皇帝——アレクサンドル1世とニコライ1世」『大東史学』第2号、2019年、37~64頁で取り上げた。

² *Зодчий: архитектурный и художественно-технический журнал, издаваемый С.-Петербургским обществом архитекторов*, СПб., 1883 г. лист. № 2.

³ Кириченко Е. И. *Архитектурные теории XIX века в России*. М., 1986. с. 112-113; Связев, Иван Иванович. Предисловие (нет названия). *Практические чертежи, по устройству церкви Введения во храм Пресвятыя Богородицы в Семеновском полку в С. Петербурге, составленные и исполненные архитектором Его Императорского Величества, профессором архитектуры Императорской Академии художеств и членом разных иностранных академии Константином Тоном*, М.: Типография А. Семена, 1845. с.1-3; Даль, Лев Владимирович. Историческое исследование памятников русского зодчества, I // *Зодчий*. 1872. 1-й год. № 2. с.10-11. 執筆者名が誤って、В. Даль となっている。Указ. соч. с. 70.

⁴ Борисова, Елена Андреевна, *Русская архитектура второй половины XIX века*. М., 1979. с. 102; Кириченко Е. И. Образцовые проекты храмов // Е. И. Кириченко и, т. д. (ред.). *Градостроительство России середины XIX — начала XX века*. книга 1. М., 2001 [2010]. г. 5. с. 226-227; Берташ А. В. Стилистические особенности храмоостроительства в 1830-1870-е годы в России: столица и национальные окраины // *Вестник Санкт-Петербургского университета. Искусствоведение*. СПб., 2013. 3 (1). с. 180 (Издательство Санкт-Петербургского государственного университета; <https://artsjournal.spbu.ru/article/view/1672>) ; Славина Т. А. *Константин Тон*. Л., 1989. с. 105-108; Wortman, Richard, "The "Russian Style" in Church Architecture as Imperial Symbol after 1881", *Architectures of Russian Identity, 1500 to the Present*, Ithaca (NY), 2003, p. 101.

⁵ Берташ. Указ соч. с. 180; Борисова. Указ соч. с. 108; Shvidkovsky, Dmitry (trans. Antony Wood), *Russian Architecture and the West*, New Haven and London, 2007, p.328; Славина. Указ соч. с. 108-110; Кириченко, Евгения Ивановна. *Храм Христа Спасителя в Москве*. М., 1992. с. 63-64; Кириченко. Образцовые проекты... с. 226; Brumfield, William Craft, *A History of Russian*

- Architecture*, Seattle (WA), 2004, p. 398.
- ⁶ Brumfield, op. cit., pp. 11, 13. マンゴは11世紀の聖堂の様式をビザンツ様式そのものと見做す。Mango, Cyril, *Byzantine Architecture*, London, 1986, pp. 182, 184. ビザンツ建築の影響の質や量については議論がある。Асеев Ю. А. *Архитектура древнего Киева*. Киев, 1982. с. 11-12.
- ⁷ 樋口諒、那須聖、「内部架構構成からみた中期ビザンツ文化圏内接十字型教会堂建築の成り立ち」『日本建築学会計画系論文集』、第737号、2017年、1817頁。Mango, op. cit., pp. 168, 170, 180-181, 184; Brumfield, op. cit., p.11.
- ⁸ Ibid., pp.13-14; Mango, op. cit., pp.181-182. ソフィア大聖堂は18世紀にウクライナ・バロック様式で改築された。
- ⁹ Brumfield, op. cit., pp. 48-49; Mango, op. cit., pp. 186-188; Заграевский С. В. Первоначальный вид церкви Покрова и Покровского монастыря на Нерли. Опыт графической реконструкции // *Материалы XXIII межрегиональной краеведческой конференции* (13 апреля 2018 г.). Владимир, 2018. С. 224-235 (http://zagraevsky.com/cloister_graph.htm; 2021.8.5) ; Shvidkovsky, op.cit., p. 28. 吉住エレナ(宇多文雄[訳])「10-12世紀古代ロシアの建築」、『ソフィア』(上智大学)、第44巻、第3号、1995年、337頁。なお、玉葱頭は創建当時のものではない。
- ¹⁰ Brumfield, op. cit., pp. 51-53; Mango, op. cit., pp. 187-188. ネルリ同様に、元々は回廊が周囲を取り巻いていた。
- ¹¹ Brumfield, op. cit., p. 63; Mango, op. cit., pp. 188-189.
- ¹² Brumfield, op. cit., p. 88; Mango, op. cit., pp. 189-190.
- ¹³ Brumfield, op. cit., pp. 94-96; Mango, op. cit., p. 191.
- ¹⁴ Brumfield, op. cit., p. 102; Mango, op. cit., pp. 190-191. アルハンゲリスキー大聖堂の屋根は後世にかなり変更されている。ブラゴヴェシセンスキー大聖堂(1484-89年)はプスコフの職人による。創建時は1個の丸屋根を持つ聖堂であったが、イヴァン4世の時代の1560年代に西側に丸屋根の聖堂が増築され、丸屋根は9個となった。その後も建て増しがあり、現在の複雑な形となった。
- ¹⁵ Mango, op. cit., p. 191.
- ¹⁶ Brumfield, op. cit., pp. 115-116. アレクサンドロフの三位一体聖堂(現ボクロフスカヤ聖堂) Покровская церковь в бывшей Александровской Слободе が1510年代の建築で、最初の石造であると思われ見解もある。Заграевский С. В. Происхождение древнерусского шатрового зодчества. Возвращение к проблеме // *Праксема*. 2018. № 2. с. 38. ザグラエフスキーによれば、アルゲンゲリスキー大聖堂を建築したアレヴィス・ノーヴィによる。
- ¹⁷ Shvidkovsky, op. cit., pp. 113-115; Brumfield, op. cit., 88, 115-118; Ушаков Ю. С., Славина Т. А (ред.). *История русской архитектуры. Учебник для вузов*. СПб., 1994. с. 196.
- ¹⁸ Brumfield, op. cit., pp. 119-122; Борисова, Указ соч. с. 102; Славина, Указ соч. с. 105-106, 119-120.
- ¹⁹ Баталов А. Л. О датировке церкви Усекновения главы Иоанна Предтечи в Дьякове // *Русская*

- художественная культура XV-XVII веков. Государственный историко-культурный музей-заповедник “Московский Кремль”. Материалы и исследования. вып. 11. М., 1998. с. 220–239 (<https://www.kreml.ru/research/library000xh/muzei-moskovskogo-kremlya-materialy-i-issledovaniya/>).
- ²⁰ 三者の類似は繰り返し述べられている。Кавтарадзе С. Ю. Старый Борисоглебский собор в Старице как образ Храма Гроба Господня. К вопросу о применимости иконографического метода в истории архитектуры // *Наука, образование и экспериментальное проектирование. Труды МАРХИ. Материалы международной научно-практической конференции 6–10 апреля 2020 г.* М., 2020. с. 121.
- ²¹ Shvidkovsky, op. cit., pp. 124, 128–129; Brumfield, op. cit., pp. 122, 124, 126; Борисова. Указ соч. с. 102; Славина. Указ соч. с. 105–106.
- ²² Брамфилдは、16世紀末、ボリス・ゴドゥノフの時代に、シヴィトコフスキーは17世紀に初期の玉葱頭が採用されたと見做す。Brumfield, op. cit. p. 129; Svidkovsky, pp. 128–129.
- ²³ リシャット・ムラギルギン、『ロシア建築案内』、TOTO出版、2002年、50頁。История русской архитектуры. с. 445; Клюкина Л. А. Визуализация теории официальной народности в храмовой архитектуре русско-византийского стиля первой половины XIX в. // *Вестник славянских культур.* М., 2020. т.58. с. 25.
- ²⁴ Brumfield, op. cit., pp. 126, 129. 丸屋根が5個ある聖堂も健在であった。
- ²⁵ Ibid., pp.134, 141–142. ドンスコイの小大聖堂は1670年代に後陣の脇の小礼拝堂と食堂、尖塔の鐘楼が増設された。Rowland, Daniel, “Architecture and Dynasty”, in: James Cracraft and Daniel Rowland (eds), *Architecture of Russian Identity 1500 to the Present*, N.Y. and London, 2003, pp. 41–42.
- ²⁶ Brumfield., op. cit., p.142. 三部構成は16世紀なかばに修道院で出現し、17世紀に聖堂でも広がった。Мельник А. Г. К вопросу о происхождении трехчастной осевой архитектурной композиции (церковь-трапезная-колокольня) // *Памятники истории и культуры Верхнего Поволжья.* Нижний Новгород, 1991. с. 212.
- ²⁷ Brumfield, op. cit., pp. 147, 150; Svidovksy, op. cit., pp.162, 164; Малиновский А. Ф. (Сост. С. Р. Долгова). *Обозрение Москвы (1820)*. М., 1992. с. 96; Мельник. Указ соч. с. 211–216.
- ²⁸ 建築家イヴァン・ザルードヌイによる。Brumfield, op. cit., p. 184; *История русской архитектуры.* с. 287, 289.
- ²⁹ Тон К. А. *Церкви, сочинённые архитектором Его Императорского Величества профессором архитектуры Императорской Академии художеств и членом разных иностранных академий Константином Тоном.* СПб., 1838.
- ³⁰ Славина. Указ соч. с. 36, 105; Борисова. Указ соч. с. 2; Бергаш. Указ соч. с. 180.
- ³¹ Борисова. Указ соч. с. 102; Славина. Указ соч. с. 105–106.

- 32 *Собрание планов, фасадов и профилей для строения каменных церквей с кратким наставлением как о самом производстве строения, так и о вычислении потребных к тому материалов: чем приложены и объяснительные чертежи важнейших частей зданий, с означением размера оных для практического употребления.* СПб.: Типография Медицинского департамента Министерства внутренних дел, 1824.
- 33 Там же.
- 34 前掲拙稿、52-56頁。
- 35 Кириченко. Образцовые проекты... с. 228-229.
- 36 Там же, с. 226.
- 37 Тон. *Церкви...* 1838.
- 38 Кириченко. Образцовые проекты... с. 226.
- 39 Тон К. А. *Проекты церквей, сочинённые архитектором Его Императорского Величества профессором архитектуры Императорской Академии художеств и членом разных иностранных академий Константином Тоном. Дополнение 1-е с 12 чертежами.* СПб., 1844.
- 40 初期の様式よりも小規模の聖堂である。Кириченко. Образцовые проекты... с. 226-227; Берташ. Указ, соч. с. 183.
- 41 Кириченко. Образцовые проекты... с. 227.
- 42 1930年にレニングラード電気工科大学の物理音響研究室に与えられ、丸屋根が取り除かれ、ファサードなども大幅に改築された。
- 43 設計通りには建設されなかった。
- 44 Кириченко. Образцовые проекты... с. 226-227.
- 45 Турчин, Валерий С. *Александр и неоклассицизм в России. Стиль империи или империя как стиль.* М., 2001. с. 336; Малиновский, Указ соч. с.174; *Собрание планов...*
- 46 Кириченко. Образцовые проекты... с. 229.
- 47 *Свод законов Российской империи.* 1857, СПб.: Тип. Второго отделения Собственной Е. И. В. канцелярии. т. 12. ч. 1: Уставы путей сообщения, почтовый, телеграфический, строительный, и пожарный. IV: Учреждения и устав строительные. с. 49. статья 218.